



TITLE:

1.概要(III 共同利用研究)

AUTHOR(S):

CITATION:

1.概要(III 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1975, 5: 32-33

ISSUE DATE:

1975-12-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162655>

RIGHT:

Ⅲ 共同利用研究

1. 概要

昭和49年度共同研究の公募は「Ⅰ. 研究課題」と「Ⅱ. 研究会課題」とに大別して行なわれ、前者については次の6つの設定課題（前年度とほぼ同じ）を設けるとともに、自由課題による申請も行なえる形をとった。

1. ニホンザル地域個体群の研究

ニホンザルの群れ社会、あるいは個体群のあり方を総合的に解析する。地域社会構造、個体群動態、生息地および食物などの環境の利用、地理的分布など、社会学的生態学的なアプローチを中心としているが、さらに集団遺伝学的・形態学的変異論などからの多面的な追求が望まれる。調査の対象となる群れおよび地域については限定を加えない。

昭和48年度よりは研究成果がまとまった分野の共同研究者が、成果をもちよって討論できる研究会を行っており今後も継続する予定である。

2. 霊長類の運動様式に関する研究 —ホミニゼーションの観点から—

霊長類の運動様式（ロコモーションも含む）は、形態・機能にとどまらず、環境への適応の一環としてもとらえることができる。本年度課題ではとくに、霊長類各分群の運動様式の相異を、生活様式および形質的特徴との関連のもとに研究し、かゝる観点からヒト化の解明を試みることに重点をおく。

3. 霊長類の生理的適応に関する研究

種々の環境要因にたいする生理的適応機構の解明を目的とする。たとえば温度をとりあげた場合は異なった順応状態にある個体について、外温とエネルギー代謝およびその他の自律的反應の関係を個体レベルおよび組織・細胞レベルで調べ順応温度の効果を明らかにするとともに、体温調節中枢および末端部反射における適応機序に神経系・内分泌系がどのように関与するかを究明する。さらに気候馴化と栄養の関係も重要であると考えられる。

4. 主としてニホンザルを対象とした行動の研究

行動とは環境からの刺激に対する一連の反応、あるいは環境に対する生体からの一連の働きかけのことであり「社会」と呼ばれるものもまたこの環境の一部であろう。本設定課題では、個体行動を通じて、ある行動に影響を及ぼしている、あるいはその行動が働きかけようとしている、「社会」とはどんなものであるかを推定することを目的とする。

ニホンザルの「社会行動」と呼ばれているもののな

かで、このような観点からの研究対象としては、昭和47年度共同利用研究会で下記のもの（1—7）に焦点がしぼられ、47年度には母子関係が、48年度にはリーダーシップがとりあげられ、重点テーマとされたことを参照されたい。

- 1) 母子関係 2) リーダーシップ
- 3) マウンティング 4) 離脱 5) スペーシング
- 6) 記号行動 7) Age change

5. 行動の発現機序に関する神経生理学的研究

霊長類にみられる行動—単純な随意運動から学習的行動、社会的行動に至るまで—にはすべて神経系内にその発現機構が備わっている。神経生理学の技術と方法論で行動の発現機構の機序を調べる。

6. 霊長類の生殖に関する基礎的研究

霊長類の性機能（性周期、排卵、黄体機能の消長、発情行動、交尾期と出産期、周産期の生理、流産、性的成熟、オス造精能、性分化）を研究する。これらに影響を与える要因として、日照時間、環境温度、食餌条件、社会的性関係とストレス、フェロモン、加齢、種差などが考えられ、これらの因子と性機能変動の因果関係を解析する。この解析には、性行動の観察、記録、血液・尿の臨床化学検査に併せて、血中ホルモン測定や、中枢・性腺の電気生理学的研究と微細構造観察などの神経内分泌の方法を用いる。

これらの研究課題について65件（130名）の応募があり、共同研究実行委員会、（久保田競、室伏靖子、田中二郎、岡田守彦）による予備手続の上、運営委員会（49年2月19日）の審議により50件（77名）が採択された。各課題に関する申請状況、採択状況は次のとおりである。

A. 設定課題

1. ニホンザル地域個体群の研究

申請17件（33名） 採択13件（19名）

2. 霊長類の運動様式に関する研究—ホミニゼーションの観点から—

申請5件（8名） 採択5件（6名）

3. 霊長類の生理的適応に関する研究

申請1件（3名） 採択1件（3名）

4. 主としてニホンザルを対象とした行動の研究

申請8件（10名） 採択8件（10名）

5. 行動の発現機序に関する神経生理学的研究

申請9件（26名） 採択7件（17名）

6. 霊長類の生殖に関する基礎的研究

申請4件(6名) 採択4件(4名)

B. 自由課題

申請21件(44名) 採択12件(18名)

研究会課題に関しては、公募に際し特に設定主題は提示されなかった。運営委員会の議を経て7件が採択されこれらの研究会のテーマを列記すればつぎのとおりである。

〔共同利用研究会〕

1. ニホンザルの現況

2. 主としてニホンザルと対象とした行動の研究

3. 脳と行動

4. 霊長類と食虫類・翼牛類の系統・進化

5. ロコモーション・ワーキング・グループ

6. ホミニゼーション

7. 霊長類タンパク質の構造・機能・進化

これらの共同研究課題、研究会に使用された費用は研究員等旅費 692.6万円、校費 412.3万円であった。円滑な共同利用研究活動の発展のためには大巾な増額が望まれる。
(久保田鏡)

2. 研究成果

設定課題 1. ニホンザル地域個体群の研究

房総のニホンザル——その分布と生態——

高杉 欣一(東大・農)

岩野 泰三(同上)

上原 重男(京大・理)

福田喜八郎(東大・農)

小金沢正昭(東京農工大・農)

房総のニホンザル調査は、房総の地域的自然全体とのつながりあいのなかでニホンザルを浮き彫りにしうるように、著者等以外の多くの人々の協力を得て、きわめて包括的・永続的な調査として行なわれている。一面では人々の自然への渇きをみだし、他面ではその当然の帰結として付随する自然保護運動と表裏一体をなしながら、あまり遠くない将来のある日、人間自身について——とくに人間の自然的基盤と文明の現状について、組織的に論及しうようになるだろうという予測をもって行なわれている。この調査は、利用できるすべての研究予算を投入した上に、多くの人々のボランティア活動によって支えられており、また一面では、人々の努力を相互に関連づけて、あわせて「ひとつの調査」として成り立ちうるよう充分に配慮はしているが、一人一人の作業としては単純素朴であって、一定期間フィールドへ出たら自分の目にふれた事実を一定の様式に従って整理記載し、採集品も同様に一定の方法で処理保存し、それらすべてを一ヶ所に集めて通覧しうるようにしているにすぎない。

上記のような調査の実態から、どの成果はどの研究費に対応するという性質でもなければ、経過報告としても研究費の出所別にはなしにくい。しかしわれわれのグループ研究も年を重ねてようやくとりまとめの段階に入った部分ができたので、別掲文献リストに1974年度中に発表したものをすべて収録した。上記のような調査の実態から明らかなように、別掲文献リストに含まれたす

べてのものに「共同利用研究費」も部分的に貢献している。

1974年度中の主たるトピックスとしては、高宕山のT-I群の個体識別が完了し、西部地域の分布域の修正がなされ、フン分析に基いて房総におけるニホンザルの食性の季節的变化がまとめられたが、これらはすべて千葉県委託調査の報告書のなかに述べられているのでここにはくりかえさない。

1974年秋の第4回一斉調査時に、元清澄地区で野生群の空間的広がりについて若干の興味ある資料が得られ、また1974年末から1975年春にかけて、新たに詳細な食いと調査が行われ、冬季の主要食物植物4種について、利用状況の時期的変化が詳細に記載されたので、これら2点について以下に報告する。なお他に新たに始められたものとしては、1974年12月から、台倉に房総自然博物館の宿泊の便が得られるようになったのを機会に、現地で処理できていどの簡単なものだが、月別にT-I群のフンについて寄生虫の調査が行なわれている。

1. 元清澄地区におけるニホンザル野生群の空間的広がりについて

高宕地区では、地形・植生条件からも、餌付け等の人間とのかかわりあいの点からも群れの直接観察が比較的容易であり、従って群れを相互に正確に識別しうるが、元清澄地区では、常緑樹を主とする比較的自然なうつつ森林が多く、餌付け等の人為が一切加えられてない、その点では全く理想的な野生群の観察が期待されるのだが、山頂部がなだらかに広がり、常緑樹の厚い葉層が視野をふさいでしまうため、群れの継続的な直接観察がきわめて困難である。

1972年の一斉調査以来今日までに積み重ねられた資料によって、元清澄地区の群れの数や、それらの全体としての分布域についてはいよいよ強固に確信するにいたっ